# 「全然」再考 ―迷信、アプレ、前提の否定など―

梅林　博人

## 一、はじめに

筆者はこれまで副詞「全然」について小考を示してきたが、この間、それに対して、直接・間接に意見や資料、情報をいただくことが何度かあった。そこで、拙稿では、そうした学恩を受けて再考した内容を記すことにしたい。

## 二、呼応の「迷信」の発生時期について

まず、「全然」の呼応に関する「迷信」の発生時期について、新たなコラムの掲示をしたうえで考えるところを述べる。

### 二―一　従来説

「全然」は「下に必ず打消を伴なう」（金田一京助編『辞海』昭和二七年五月一日初版　三省堂）という言説が「迷信」であるということは、今日、少なくとも研究者の間では周知のこととなった。しかし、この「迷信」の発生時期について具体的に述べる論考は必ずしも多くはない。

筆者はかつてその点について、「昭和10年代末から昭和20年代末の間に発生してきたものと見られる」と述べ（梅林（一九九五）五〇頁）、さらにその後、梅林（二〇〇〇）において、「世間は、アプレゲールの発するあるいはアプレゲールのまねをして発せられる「全然エライ」などを批判するために、当時の「全然」についての言語事実―肯定表現を伴う用法もありはするが、しかし、打

ち消しや否定的表現を伴う用法のほうがやはり主流であるという事実―から、批判に役立つようにその内容を取捨して、「『全然』は必ず否定を伴う」という批判用の決まり文句を導きだし」（六四頁）たと述べた。後者梅林（二〇〇〇）は、次の①～④の事項を勘案すると、必然的に、「迷信」の具体的な発生時期は昭和二五年前後であると述べていることになる。

①「アプレゲール（無軌道な戦後世代）」が流行語となったのは昭和二二、三年である。[1]

②「全然、肉體派ね」（『自由学校』昭和二五年）、「アプレゲールは全然エライよ」（『安吾巷談』昭和二五年）などの実例が存在する。

③「たとえば「到底」や「全然」などを、「到底よい」「全然ある」などと使うことはできませんから、一定の呼応を必要とする副詞の種類をたてることはできると考えられます。」（『新制中学国文法口語編教授参考書』昭和二五年　星野書店　八七頁　梅林（一九九五）四五頁で既述）という記述がある。

④『辞海』（昭和二七年）には「下に必ず打消を伴なう」と記されている。

これに対し、「全然」の用法の変遷を調査した尾谷（二〇〇六）は、その調査結果から、

「〝全然〟は否定表現と呼応するものだ」という〈迷信〉はこの時期（否定との呼応が全用例数の六割以上となる一九三〇年代以降―補梅林）に定着し始めたと見て間違いなさそうである。つまり、梅林（二〇〇〇）によるアプレゲール批判説よりも若干早い時期から〈迷信〉は定着しつつあったことになる（一九頁、原文横書き）。

というような新たな可能性を指摘している。

## 二―二　肯定話法の発祥にふれるコラム

筆者は、こうした尾谷説を受けて、近年、「迷信」の具体的な発生時期を再検討していたのであるが、その際、「全然」の肯定話法の発祥についてふれるコラム「落語のすすめ」を見出すに至った。[2] 従来、諸論考では紹介されていない資料と目されるので、やや長くなるが、以下にその全文を引用することにしたい。

去年のはなしで鬼がクシャミでもしそうなエピソー

ドだが東京都の教育研究員による国語科の研究集会が白鷗高校でひらかれたとき、質問に立ったひとりの教師が生徒たちの日常会話にふれて、ほんらい打消しの場合だけに使われるはずの「全然」という副詞を、ちかごろの生徒たちは、たとえば全然イカス、全然美しいなどと肯定に使っているが、こういう用法について研究者諸賢の見解いかんと述べたそうである。

さっそく活発な論議がゆきかい、まことに学のあるところが開陳されたようだが、カンジンな問題―「全然」がいつ頃から肯定に使われだしたかという歴史的考案については誰ひとりセンサクする者がなかった。

そこに登場したのが某商業高校の教頭をつとめる落語通の池上信一である。池上は第一回講談倶楽部賞をうけたことのある作家だけに、「全然」の肯定話法発祥についても知識があったわけだ。昭和十六年五月末に、並木一路、内海突破の漫才が東宝名人会に出場、いかにして丸の内人種をひきつけるかを考えたあげく「全然」を肯定で使用するトンチンカンな話法を創案し、またたくうちにこの話法が流行語となって日本じゅうに伝わった。その際ＮＨＫのラジオが果した役割は無視できない。

池上信一の説明に研究者たちはただ眼を丸くするばかりだったようだが、そのときの感想を彼が、勤務先の「研究論集」に執筆しているのをさいきん読んだ。

彼は芸能通らしく夏目漱石の名作「坊ちゃん」の表現にひそむ落語性をほりおこしいかにもおもしろいエッセイを書いているのだが、ここにいいたいのは、現代国語教育や文学鑑賞に、意外なエァポケットがひそむのではないかという実感である。国語教育者への「落語のすすめ」を考えるべきではないか。

（尾崎秀樹（一九七八）一八七頁　「落語のすすめ」一九六六年二月二八日付）

池上信一の勤務校とされている「某商業高校」は東京都立第四商業高等学校で、「そのときの感想を彼が、勤務先の「研究論集」に執筆している」については、池上信一（一九六六）「名作「坊っちゃん」の落語性―その文例と典拠について」[3]であることは確認できたが、その他芸能関係の時事項目については、まだ確認が不十分である。

ただ、「白鷗高校」「昭和十六年五月」「並木一路、内海突破」「東宝名人会」「池上信一」という具体的な内容が記されていることや、並木・内海の芸能活動の時期が符合していることなどから、この文章を単なる誤報として処理することもためらわれる。そこで、現時点では、今後事実確認が必要な補助資料として見ることにしておきたい。

## 二―三　新たな疑問および戦前発生説への対応

さて、こうしたコラムの内容に先の尾谷説を加味してみると、「〝全然〟は否定表現と呼応するものだ」という「迷信」は、すでに昭和十年代には存在していたのかもしれないと考えられてもくる。

しかし、そのような考察の進展も期待される一方で、次のような疑問もまた生じてくることになる。

すなわち、すでに先行諸研究によって指摘されているように、昭和戦前には、明治、大正の流れをくむ、いわゆる伝統的「全然＋肯定」が少なからず見受けられる。そうなると、その伝統的「全然＋肯定」の使用者（それは相応たる大人）は、どのような意識の下でその表現を用いていたのであろうか。「〝全然〟は否定表現と呼応するものだ」という意識との間に矛盾を感じつつ、伝統的「全然＋肯定」を使用していたということなのであろうか。

尾谷（二〇〇六）は、この種の問題について、「当時の「全然」は「ぜんぜん」と発音されていた保証がなく、「すっかり」「まるで」「まるきり」の当て字として使用されていた事例もあるため、別の表現として認識されていた可能性もある。」（二三頁「注1」）という見解を示している。この解釈は一理あると思われるものの、しかし、先行諸研究で紹介されている昭和戦前の伝統的「全然＋肯定」が、少ないとは言いがたい量であり、そのすべてについてこの説明を与えるとすると、それもまた不自然であるように思われてくる。

ただ、筆者自身も、この問題については、現時点で合理的な説明の用意はできていない。したがって、〈当時の大人たちは、旧来的用法としてあえてその表現を使用し、それによって古風なニュアンスや重みなどの副次的意味を表現に添えていたのかもしれない〉といった推察の域を出ない粗案を示すことが出来るのみである。

そして、このように粗案のみであることに加え、先のコラムの事実確認も不十分であること、また、尾谷（二

〇〇六）が説く「語用論的推論／語用論的強化」に基づく「迷信」の発生と定着については、「無理があるように思える」（新野（二〇一一）二〇六頁）という指摘もあることなどから、総合的に判断して、現時点では、「迷信」の戦前発生については容認を控えることにしたい。

## 三　流行語「全然＋肯定」とアプレゲールの関係について

次に、昭和二〇年代に「批判の対象であった流行語「全然＋肯定」はアプレゲールが使用していた」（梅林（二〇〇〇）六八頁）という内容について考えてみたい。

### 三―一、使用者をアプレゲールと見る理由

流行語の使用者がアプレゲールであるという卑見については、

「アプレゲールであるユリーが「〝全然〟＋肯定」を使っていること」は確かであるものの、「「〝全然〟＋肯定」が「アプレ語」とみなされていたこと」を直接証明する材料が欲しいところである。」（新野（二〇一一）二〇六頁、原文横書き）

という指摘をいただいた。

この点に関しては、梅林（二〇〇〇）において、『安吾巷談』の文章からも判断をしたことを書き漏らしていたので、ここでまずその点を記しておくことにしたい。説明のため、『安吾巷談』の一部を次に引用する。

夜、頭をかって、美姫に対面に赴くべきや。朝、頭をかって、何食わぬ顔。会社へ出勤すべきや。ここへ遊びにきた男の子は、どうしてもこの難問題を考えなければならない。／案内人（文春の誰かさん）はニヤリと笑って言いました。／「それは夜かるべきですよ。オールナイトは八百円の時間まで、頭かってまってるです。オシロコ（ママ）は胃にもたれるし、ビールは高いし、頭かるのは実用的で、全然もうかッとるですから」／アプレゲールは全然エライよ。（『安吾巷談』田園ハレム　引用は『底本坂口安吾全集第九巻』昭和45年冬樹社、一二七頁）

この文章の最後の一文は、散髪について「実用的」な

考え方をする歓楽地の案内人をアプレゲールと見なし、その案内人の「全然もうかッとる」という表現を受けて、安吾が「アプレゲールは全然エライよ」と述べていると考えられる。そうしたことから、つまり、安吾は、「全然もうかッとる」という表現の使用者をアプレゲール（戦後世代）と見なしていたと考えられよう。この事とユリーが「全然＋肯定」を使っていたこととを手がかりとして、梅林（二〇〇〇）では「流行語「全然＋肯定」はアプレゲールが使用していた」と述べたのである。

もっとも、これでもまだ「直接証明する材料」とは言い難いから、新野氏の指摘は謙虚に受け止めるが、ここでは複数の要素からの判断であるということを補足しておきたい。

### 三―二　子供に対する教育的な思慮

なお、この「アプレゲールが使用していた」という言い回しについては、もう一点、考え直してみたいことがある。それは、このような言い回しをしたことによって、戦後直後の流行語「全然＋肯定」が、あたかもアプレゲールによる案出であるとか、あるいは、彼らの専用表現であるといったような誤解を招いたのではないかという点である。

筆者自身は当初から、「アプレゲールも用いていたが、その流行語は、そこにとどまらずに、広く一般の若者や子供たちにも普及していた」という考えであった。が、梅林（二〇〇〇）では、日大ギャング事件などと関連させて述べたことから、犯罪を犯すようなアプレゲールのみが用いていた、または、流行語の使用者は犯罪を起こしうる年齢に達した若者であるという印象を与えてしまったようにも思われる。

当時の大人たちが懸念したのは、アプレゲールによる流行語の使用よりも、さらに若い、次代の担い手である子供たちによる流行語の頻用とそれによる低俗化であろう。その危惧は、次のような新聞コラムからもうかがえる。

「女性の声」　アジャパーと子供　気にかゝる流行語の反応　▽〝アジャパー〟最近うちのこどもたちが得意そうにこの言葉を使いますのでその意味をきゝましたところ、みんなが使うからぼくも使うのだ、といっています。もちろん単なる流行語で、この言葉にも何のよりどころもないのかも知れません

から、こどもは自然な答えをしたのでしょう。でもこどもたちは物ごとに失敗したときや、小言をいわれたときに使っているようです。【中略】使うことによってますますあきらめの気持を増長させる危険性があると思います。【後略】（読売新聞　昭和二八年五月二八日朝刊五頁）

岩淵悦太郎「流行語」（『言語生活』昭和二八年一二月号、梅林（二〇〇〇）六七～八頁で引用）にも、「気をつけたいことは、こういう流行語を、子供がどこから学んでくるかであり、どういう心理で用いるかである。【中略】もし不健康な生活に子供が接触していて、そこから流行語を受け入れているようなら、子供の生活指導が大切である。」とあるが、こうした文章からうかがえる、いつの時代にも存在する大人たちの子供に対する教育的な思慮を考えると、流行語「全然＋肯定」への批判の背景には、「無軌道な若者（アプレゲール）も用いるような流行語を子供たちが頻用する様子を見るとその将来が案じられる」という思考を見るべきなのであろう。

以上のように考えてみると、「アプレゲールが用いていた」という言い回しは言葉が足りず、その使用者に関しては、むしろ「アプレゲールが用いていたような流行語「全然＋肯定」を、子供たちも用いるようになってきていた」とでも述べるべきであったように考えられる。

そのうえで、今日では有名となった小堀杏奴の「近頃気になるのはよく、「全然よく出来るの。」式の言葉を使ふ事である。「全然」とは否定の意味であって、「全然出来ない。」とか「全然駄目だ。」と云ふのならわかるが、これでは意味をなさない（「思ひ出」『言語生活』昭和二八年三月）という流行語批判の背景を再解釈してみるならば、それは「アプレゲールへの嫌悪感で満ちていた世相を背景として行われている」（梅林（二〇〇〇）六八頁）という後ろ向きで表層的な捉え方よりも、そのもう一歩奥にある「未来を担う子供たちを健全に育むための思慮に満ちた世相を背景として行われている」といった前向きな捉え方をする方がより適切なのではないかと考える。

## 四　「前提の否定」という解釈に伴う課題

### 四―一　新しい機能の発生に関する課題

最後に、現代語の「全然＋肯定」（「全然、おいしい／

おもしろい／いい」）の文法的機能を「前提を否定する」と解釈する場合の課題について若干ふれてみたい。

すでに新野（二〇一一）が、「先行文献では、「相手の予想や発言内容など、何らかの前提となる事柄を否定するような文脈で使われる」との指摘が多く見られた」（一九二頁）と述べているように、近年、こうした文法的解釈は目立ってきており、類似の見解は、足立（一九九〇）、有光（二〇〇二）、小林（二〇〇四）、田中（二〇〇五）、尾谷（二〇〇六）、尾谷（二〇〇八）、新野（二〇一一）といった複数の論考で見ることができる。

そして、これらの論考を見ると、現代語「全然＋肯定」にそのような機能を見ることはきわめて自然のように考えられてくる。したがって、筆者は、「全然」の新しい機能をそのように見ることに戸惑いは感じない。

しかし、そのように解釈することに課題がないのかと言えば、それは決してそうではない。むしろ、「では、そのような機能は、いつ、どこから、どのようにして発生してきたのか。」という新たな課題が生じてくるように思われるのである。

### 四―二　課題に対する見通し

そしてこれまでのところ、この新しい課題について通史的な観点から報告する論考はないように見える。したがって、これは研究上の今後の課題といってよいだろう。

現在のところ、筆者自身にも、この課題について十分な論述をする準備はまだないのであるが、ただ、一つの見通しとしては、「AよりBが全然…。」といった比較表現が、その発生に関わっているのではないかと考えている。そのように考えるのは、尾谷（二〇〇八）の次の論述がヒントになっている。

(11)a. ??キリンは首が全然長い。
　b. ??昨日は子供と丸一日遊んだので、全然疲れた。

上記の文が不自然に感じられるのは、それらの発話によって否定される文脈想定が発話時に想起しにくいためなのである。その証拠に、これらに否定される想定を補ってやれば容認文となる。

(12)a. キリンは首は、人間なんかよりも全然長い。
　b. 昨日は子供と丸一日遊んでいたので、普段の仕事なんかより全然疲れた。（一〇七頁）

この言説では、(11)を比較表現にすることで違和感が減じると述べられている。こうした状況が通時的にも起こったとすれば、現代語の「全然」が、「何らかの前提を否定する」機能を獲得し、その結果、現代語「全然＋肯定」が増殖し、そして現在のように幅を利かせるようになって来たのではないだろうか。

こうした仮説を確認するためにも、注目すべきは、戦前から戦後にかけての比較表現の使用実態である。筆者は、戦前の実例として、

○山本薩夫と小田基義の二人の共同監督、手分けしてやったのであるが、山本の方が全然優れてゐて、仕事も早いし頭もいゝ。小田は、とても頭が悪くて、将来が無い。(昭和一六年五月二一日)〔『古川ロッパ昭和日記(戦中篇)』二〇〇七年　晶文社刊〕

を見つけているが、こうした実例の量的推移を確認していくことが、「全然」の新たな機能の発生を考えるうえでの手がかりとなるのではないかと考えている。

## 五　おわりに

以上、副詞「全然」について、「迷信」の発生時期、アプレゲールとの関連性、「前提の否定」という文法的解釈に随伴する課題といった観点から、現時点での考えを述べた。

本稿で新しい資料を示せたことは意義があったと思われるが、新聞・雑誌などのコラムを言語資料としてどう解釈し考察に結び付けるべきなのか、難しい一面もあるように思われた。ただ、「表現に対する意識」という観点からの探究を考えた場合、実例などを確認する言語的な集計資料だけではなく、コラムや時評といった、どちらかといえば風俗史的な資料を扱うこともまた考えていかねばならないと思われる。

本稿では、そうした資料の収集や分析などについては課題を残している。機会を別に改めることにしたい。

【注】

(1)岩波書店編集部編(二〇〇一)『近代日本総合年表第四版』(岩波書店　三六二頁「社会」項目)では昭和二二年、木村傳兵衛・谷川由布子ほか著『新語・

流行語大全』（自由国民社 二九頁）では昭和二三年とされている。

（2）そのコラムの存在は、二〇〇七年四月当時までは開設されていたホームページ「過去ログ」（http://home.highway.ne.jp/sfuru/okigaru9902.html/現在は閉鎖）に次のように紹介されていた。「尾崎秀樹著『コラムのつぶやき（上）』（スタジオＶＩＣ）に収録されている、１９６６年2月28日付けの「落語のすすめ」と題するコラムでは、もう一ひねりした出来事が描かれている。」

（3）池上（一九六六）には、昭和十六年の内海・並木の漫才の様子などが次のように記されている。「彼等は、どうしたら点の辛い丸の内の聴衆の心を捕えられるかと苦心を重ねた末にこの「全然」を肯定に使用する耳触りな話法を考えついたのである。これはアタった。語感の鋭いこの劇場の客の耳を意外な新鮮さで十二分にくすぐったのである。大受けに受けて十日間を終わり、しかも当時唯一のマスコミであるＮＨＫの電波にまでそのまま乗せて全国へ送られたのであるから、影響は大きかった。／放送の翌日はもう、通勤の電車の中での会社員の会話にも、出勤した職場の若手教師（私もその一人だった）の会話にも、やたらに入り込み、他教科の先生たち（殊に商業）の先生がたの中には、堂々と講義の中にまで使用して人気を博する者も出てくるし、一週間経つかたたぬに一世をフウビしてしまったのだ。しかし言葉は、このような場合は不自然な耳触りイコール新鮮さであって、余りに使用され過ぎて、不自然さに誰も気付かなくなった時―誤りであることを知ってるのは中年以上か、専門の研究者だけであるようになった時、その新鮮な魅力は失せて、大人の世界の会話からは大きく後退する。今日のコマーシャルの文句に、やたらに外来語を入れてるのも今に、誰も耳触りでなくなる時が来るに違いない。しかし、そうなっても残喘的な使用状態が生徒の世界には尾を引いて残り、語法にそれほど重きを置かぬためと話し手が世に出ての歴史が浅いだけに何等の抵抗もなく肯定の副詞として使用しているので、それほど異とするには足らないのである。」（五九頁）。なお、池上（一九六六）の入手については本学図書館のレファレンスにお世話になった。記してお礼申し上げる。

【参考文献】

足立広子（一九九〇）「副詞「全然」の用法について」『南山国文論集』14　南山大学国語国文学会

有光奈美（二〇〇二）「否定的文脈と否定極性項目に関する一考察 —"not at all"vs.「全然」を中心に—」『言語科学論集』8　京都大学大学院人間・環境学研究科

有光奈美（二〇〇八）「日英語の対比表現に見られる非明示的否定性と量・質・態度に関する変化のメカニズム」児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム—山梨正明教授還暦記念論文集』ひつじ書房

池上信一（一九六六）「名作「坊っちゃん」の落語性—その文例と典拠について—」（『研究論集』東京都立第四商業高等学校）

梅林博人（一九九四）「副詞「全然」の呼応について」『国文学解釈と鑑賞』59—7　至文堂

梅林博人（一九九五）「「全然」の用法に関する規範意識について」『人文学報』266　東京都立大学人文学部

梅林博人（一九九七）「肯定表現を伴う「全然」の異同について」『人文学報』282　東京都立大学人文学部

梅林博人（二〇〇〇）「流行語批判とその背景—「全然」の場合について—」『相模国文』27　相模女子大学国文研究会

岡崎晃一（二〇〇八）「「全然」考」『親和国文』43　神戸親和女子大学国語国文学会

尾崎秀樹（一九七八）『コラムのつぶやき（上）』スタジオVIC　一八七頁

尾谷昌則（二〇〇六）「構文の確立と語用論的強化　「全然～ない」の用例を中心に」『日本語用論学会大会研究発表論文集』2　日本語用論学会

尾谷昌則（二〇〇八）「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム—山梨正明教授還暦記念論文集』ひつじ書房

窪園晴夫（二〇〇六）「若者ことばの言語構造」『言語』35—3　大修館書店

小池清治（一九九四）『日本語はどんな言語か』ちくま新書

小林賢次（二〇〇四）「全然いい」北原保雄編『問題な日本語』大修館書店

鈴木英夫（一九九三）「新漢語の受け入れについて―「全然」を例として―」松村明先生喜寿記念会編『国語研究』明治書院
田中一彦（二〇〇五）「「全然おいしいよ」は問題な日本語か？」『言語情報学研究』1　大阪市立大学文学研究科言語情報学会
新野直哉（二〇一一）『現代日本語における進行中の変化の研究―「誤用」「気づかない変化」を中心に』第2部「「〝全然〟＋肯定」をめぐる研究」ひつじ書房
野田春美（二〇〇〇）「「ぜんぜん」と肯定形の共起」『計量国語学』22―5　計量国語学会
松井栄一（一九七七）「近代口語文における程度副詞の消長―程度の甚だしさを表わす場合―」『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院
松井栄一（二〇〇四）『「のっぺら坊」と「てるてる坊主」―現代日本語の意外な事実―』小学館　二三七～二四六頁
若田部明（一九九一）「「全然」の語誌的研究―明治から現代まで―」『解釈』37―11　教育出版センター

【付記】本稿は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」の成果を発展させたものである。

（本学教授）